

佳作

見えない壁を越えて

埼玉県立戸田翔陽高等学校 1年

匿名

もし目の前に障害のある人がいた時、私は普通の人として変わらず、普通に接することができるだろうか。そう心の中で問いかけてみたとき、少し迷ってしまった。学校で「みんな違ってみんないい」と教えられてきたし、障害のある人と健常者の間に壁を作ってはいけないと学んだ。それでも実際に自分がその場に立った時、無意識のうちに相手を「特別な存在」として見てしまうのではないかという不安がよぎった。そんな自分の中にある目に見えない壁を見つめ直すために、私はこの作文を書くことにした。

私が高校一年生になってバイトをし始めて少し経ったころ、チック症を患ったお客様が来店された。私はその時レジをしていて対応できなかったけれど、店長が優しく目をしっかりみて接していた。私はそれを見て、その接し方は普通の人として優しくしているのか障害のある人として接しているのか、と考えてしまった。その夜、チック症のことをもっと知りたいと思い、チック症の特徴や患ってしまった原因を調べていた。チック症とは、本人の意識に関係なく、体が急に動いたり、声が出たりしてしまう神経的、精神的な症状のこと。瞬きが多くなる、首を振るなどの運動チックと、咳払いを繰り返す、鼻を鳴らすなどの音声チックに分けられていることや、一部の症状が複数組み合わせあったトゥレット症候群というものもあると知った。そうなる原因はストレス、不安、疲れなどが関係していると知った。また、チック症そのものが障害とされるわけではなく、日常生活に支障がでる程の強いチック症状が続く場合には発達障害や精神発達症群として医療や支援の対象となることが分かった。私はこの事を知り、障害は生まれつきのものであれば、社会による影響で発症してしまうものもあると分かった。

私はこの出来事をきっかけに、「障害」という言葉の意味を考えるようになった。身体的な違い、行動の違い、見た目の違い。そういった「違い」は確かに存在する。そしてその違いをどう受け止め、どう接していくかは私たち一人一人の心の持ち方にかかっていると思う。本やインターネットで調べるだけでは分からない、実際に出会い、関わることでしか気づけないことがある。だからこそ私はもっと多くの人と関わり、知る努力をしていきたいと思った。そして、たとえ相手がどんな背景や特徴を持っていたとしても、まずは一人の人間として向き合うことを大切にしたい。

私たちの社会には、まだ見えない壁や無意識の偏見が存在している。それは、決して誰かが悪いわけではなく、「知らないこと」によって生まれてしまうのだと思う。だからこそ私は、自分自身がまず知る努力をし、周囲の人にもそれを伝えられるような人になりたい。そしていつか、誰もが「普通」に関われる社会が当たり前になることを願っています。

そのためには、まず自分自身が偏見にとらわれず、多様な人と関われる経験を重ねることが大切だと感じている。これから先、学校生活や社会に出ていく中で、様々な人と出会うだろう。その中で、相手のことをよく知ろうとする姿勢や、思いやりを持って接する心を忘れずにいたい。また、自分と違う価値観や考え方を持つ人とも向き合い、理解し合おうとする努力を続けていきたい。そうした積み重ねが、誰もが生きやすい社会を作っていく第一歩になると信じています。しかし私自身

も、まだまだ知らないことが多く、戸惑ってしまうこともあると思う。それでも、分からないからと言って距離を取るのではなく、「知りたい」、「理解したい」という気持ちを大切にしたい。少しの勇気や思いやりが、相手にとっての安心や信頼につながることもある。これからも日々の生活の中で出会う人や出来事を大切に、自分自身の視野を広げていきたいと思う。そして、誰もがありのままを受け入れられる社会の一員として、私もその一歩を踏み出していきたい。